

I 研究の概要

I 研究の概要

1. 研究の流れ

21世紀を迎え、障害のある子どもたちの教育をめぐる様々な状況が変化を見せる中、障害のある子どもの教育の新たなシステムづくりや制度の再構築を目指した取り組みが多くなされている。

本校では、平成14年度より「一人一人の『わかる』を大切にした学習活動をめざして」を研究主題とし部単位で実践研究に取り組んだ。この取り組みを通して、「特別支援教育」の視点から、私たちの目の前にいる子ども一人一人の教育的ニーズを、より具体的に把握し、そのニーズに適した学習活動（「授業」などに限定しない学校生活全てにわたる活動）での支援のあり方を探っていく必要性を感じた。

そこで、第2年次（平成15年度）には子ども一人一人のニーズに、より具体的に応じられるように、研究体制を従来の「部単位」から「グループ単位」に変え、全教員が上記の視点から研究テーマを設定し、それをもとにグループを構成し、実践研究に取り組むことにした。この変化によって、今までの全体の研究主題を基に個々の研究テーマを設定し、実践を行っていくトップダウン的な研究活動から、個々の研究テーマを設定し実践を行い、そこから学校に求められているものや大切なものを見つけ共有化していく、ボトムアップ的な研究活動に変わったと言える。

さらに、第3年次（平成16年度）は「子どもから出発する」という視点を、全教員がより意識し明確に押さえながら実践研究を行えるよう、研究主題を下記のように改めることにした。

一人一人の豊かな生活をめざす実践
～子どもから出発して～

このように、研究の体制や研究主題を、私たちの「子どもから出発する」というスタンスに、よりあった形に変えながら実践研究を積み重ね、今年度、最終年度を迎えることになった。

2. 今年度の研究

(1) 研究の方法

これまでの研究の流れを受けて、平成19年度も研究グループを編成し、「グループ単位」で実践研究に取り組んできた。これまで通り、目の前にいる「子どもから出発して」全教員が各々研究テーマを設定し、それらのテーマを基に研究グループを編成した。この研究体制での取り組みにより、次の3点についても期待できると考えている。

- ①「特殊教育」から「特別支援教育」へ、また国立大学附属学校の法人化という大きな流れの中で、足元をしっかりと見定め、本校の進むべき方向性を見出す
- ②研究が日々の教育実践と遊離せず、より実践に還元される
- ③教師一人一人が指導力や実践力をつけ、より専門性を磨く

各実践は分離独立した一研究で終わるのではなく、各実践の成果を本校の教育の中で共有化し、お互いを関連づけ、学校教育全体の中に位置づけていくことをねらい、本研究主題の最終年度となる今年度は、各研究実践の成果を検証し、本校の教育への共有化、システム化を図ってきた。

また国立大学の法人化により、今まで以上に大学と附属学校の連携が求められている。そこで「グループ単位」での研究スタイルを取り入れ、より実践力や専門性を高めていきたいと考え、大学教員との共同研究というスタイルを基本とした。そのスタイルにより本大学との連携だけではなく、他大学との連携、地域の専門家や福祉施設との連携など、共同研究の連携に拡がりが見られるようにもなった。今年度も、これらの連携を大切にし、有機的なものとなるように、そして連携の協力の輪がさらに多方面へと広がっていくことを期待している。

(2) 研究グループ

平成 19 年度は全教員が各々研究テーマをもとに、以下のような研究グループを構成した。

<平成 19 年度 研究グループ>

| グループ | 概 要 |
|---------|--|
| からだづくり | G ボールを使ったボールエクササイズの実践を通して、楽しみながらからだづくりをするとともに、運動に対する意欲を育てる |
| 自立活動 | 目の前にいる子ども一人一人と向き合い、その課題に対する適切な支援のあり方について実践研究を行う |
| 授業づくり | 授業の中で教師の専門性を生かし、子ども達の生活を広げ、豊かな生活に結びつけていくための実践研究を行う |
| 里山 | 「角間の里」周辺の里山を活用した学習活動を計画・実践し、活動の様子をまとめるとともに、3年間の里山学習の成果を考察する |
| サポートブック | エクセルを使ったサポートブックのフォームを活用し、ワークショップで作成者側へ、現場実習で支援者側へのアンケートを行い、その結果を考察する |
| 情報 | イントラネットを活用した支援者間の連携についての研究に引き続き、支援者間の情報交換、及びその連携におけるwebメールの活用を試み、その有効性を検証する |
| 進路 | 子ども達が自分の今の生活や、将来の生活に対して関心をもち、主体的に生活をデザインする力を育てることを目指し、実践を通しながら、進路指導のあり方を検討する |
| 教育相談 | 教育相談として、幼児期については幼児教室の実践より、学齢期については特別支援教育コーディネーターの実践より考察する |

3. 各研究グループのまとめ

今年度は本研究主題の最終年度である。これまでの各実践の成果を本校の教育の中で共有化し、学校全体の中に位置づけることを目指し、これまでの研究で得られた成果や意義、課題および方向性について、繰り返し話し合いや検討会を行い、研究グループ毎にまとめた。各研究グループの成果は次の通りである。

<各研究グループの成果>

| グループ | 研究の成果 |
|----------------------|--|
| からだづくり (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ Gボールを利用した「ボールエクササイズ」が、全学部の活動の一つに位置づけられ、子どもたちが自ら楽しみ、意欲をもちながら、身体を動かすようになった ・ 子どもの食事や生活での課題を、養護教諭や栄養士、学校医などのスタッフが連携して取り組み、さまざまなアプローチを行うことで、保護者の「食」への意識を高めた |
| 自立活動 (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学の先生や専門家などと連携して研究を進めることで、指導に客観性をもたせながら実践を深め、教師の専門性を高められた |
| 授業づくり (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 目の前の子どもからスタートした日々の授業の地道な実践により、教師の授業づくり力を高めた |
| 里山 (H17～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 里山での活動内容を「実践集」としてまとめた ・ 小学部、中学部での教育課程に里山活動を位置づけた ・ 里山活動の有効性を確認した |
| サポートブック (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ どのような人でも、簡単に作りやすいサポートブックのフォームを作成した ・ 講座を開講したり、ホームページにフォームをのせたりし、サポートブックを地域に広め、必要性を高めた |
| 情報 (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの学習や支援において、情報機器やそのネットワークを活用する可能性や有効性を確認した |
| 進路 (H17～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 主体性を育てる進路指導の体制を整えた ・ ネットワークによる支援が行える、指導の体制を整えた |
| 教育相談 (H15～H19) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 本校での教育相談システムを構築した ・ コミュニケーション支援についての教師の専門性を高めた |

これらの成果について「学校」をキーワードに整理してみると、右図のように整理される。各グループの詳しいまとめについては、p. 7からの「Ⅱ各グループのこれまでの研究のまとめ」を参照してほしい。

各グループの主な成果とその拡がりについて見ていくと、からだづくりグループの「ボールエクササイズ」「医療機関などとの連携体制」により、学校での取り組みが家庭生活の場面にも反映された。情報グループの「情報機器」を活用した活動によって、家庭生活場面での人とのつながりに拡がりが見られるようにもなった。

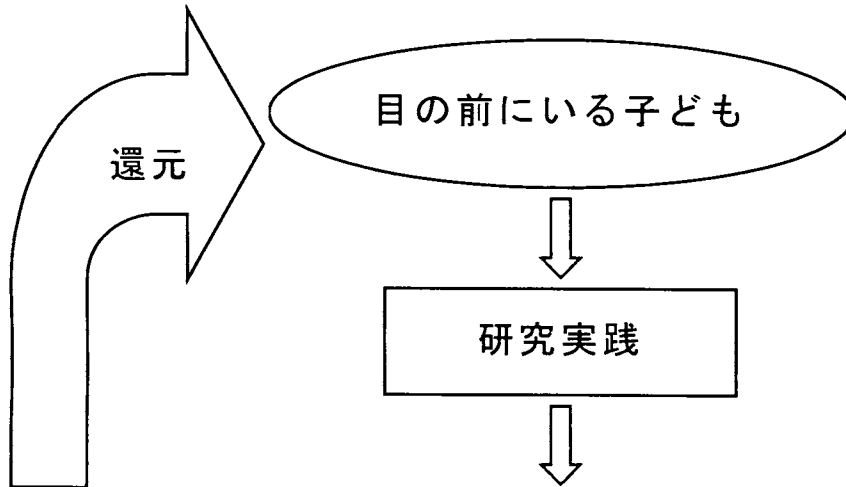
さらに、自立活動グループや授業づくりグループの研究の成果は、学校での授業における教師の子どもの捉え方や、活動の取り組み方につながるであろう。また、里山グループの「里山を利用した活動」によって、子どもの活動内容や活動場面の拡がり期待できる。

サポートブックグループの「サポートブック」と進路グループの「進路指導の体制」により、子どもが産業現場等の実習や就労する際に他機関との連携がとりやすくなり、社会生活へスムーズに移行できるための支援として学校に位置づいた。さらに特別支援教育の拠点としての本校に必要ではないかと感じられた「教育相談システム」が教育相談グループによって構築された。

このように、私たちが目の前の「子どもから出発して」実践に取り組んだ際に、大切に

はないかと感じたものが、これまでの研究実践を通して、「子どもに還元できるもの」として本校に位置づけられてきたことを確認することができる。

＜研究の成果の学校での位置づけ＞



＜学校における成果の位置づけ＞

| 位置づけ | グループ名 | これまでのグループ研究の成果 |
|---------------|---------|----------------------------------|
| 教育課程上の位置づけ | 里山 | 小学部「生活」の活動 中学部「総合的な学習の時間」 |
| 活動内容・授業内容 | からだづくり | ボールエクササイズ |
| | 里山 | 里山を利用した活動 |
| | 情報 | 情報機器を活用した活動 |
| 体制づくり・システムづくり | からだづくり | 医療機関などとの連携体制 |
| | サポートブック | 産業現場などとの連携 |
| | 進路 | 主体性を育てる進路指導体制 ネットワークによる進路支援体制 |
| | 情報 | 子どもの支援者間のネットワーク |
| | 教育相談 | 教育相談システムの構築 |
| 教師の専門性 | 自立活動 | 子どもの課題への支援の在り方 |
| | 授業づくり | 授業づくり力 |
| | 教育相談 | 子どもの捉え方 |

4. 今後について

これまで行ってきた研究では、目の前の子どもから出発することを大切にし、具体的な実践を通して子ども一人一人の支援を考えてきた。それぞれの実践研究の成果を今年度、「教育課程」「活動内容・授業内容」「体制づくり・システムづくり」「教師の専門性」などに整理し残せたことが、大きな成果であると言える。

今後はこれらの実践研究の成果を学校全体で共有化し、互いに関連づけながら、子ども一人一人のニーズに応えるために活かされていくことをめざしたい。